



日本現代文學全集・講談社版 95

助 之 作 田 織
光 英 中 田
喜 民 原 集

編 集
伊 藤
龜 井 勝
中 村 光
平 野
山 本 健
整 郎 夫 謙 吉

日本現代文學全集

95

織田作之助・田中英光・原民喜集

編 集

伊 藤 整
龜井勝一郎
中 村 光 夫
平 野 謙
山 本 健 吉



昭和41年7月10日 印刷

昭和41年7月19日 發行

定 價 500 圓

© KODANSHA 1966

著

者

お だ さく の すけ
織 田 作 之 助
た なか ひで みつ
はら たみ き
原 民 喜

發 行 者 野 間 省 一

印 刷 者 北 島 織 衛

發 行 所 株式會社 講 談 社

東京都文京區音羽町3～19
電話東京 (942) 1111 (大代表)
振 替 東 京 3 9 3 0

印 刷 製
寫 真 刷
版 印 本
製 函
背 皮
表紙クロス
口繪用紙
本文用紙
函貼用紙
見返し用紙
扉 用 紙

大日本印刷株式會社
株式會社 興 陽 社
大 製 株 式 會 社
株式會社 岡山紙器所
株式會社 第一紙藝社
小林榮商事株式會社
日本クロス工業株式會社
日本加工製紙株式會社
本 州 製 紙 株 式 會 社
安倍川工業株式會社
三 菱 製 紙 株 式 會 社
神 崎 製 紙 株 式 會 社

落丁本・亂丁本はお取りかえいたします。

織田作之助集 目次

卷頭寫眞
筆蹟

放浪	七
夫婦善哉	二
子守歌	四〇
動物集	五〇
勸善懲惡	五
聽雨	五
道	三
世相	八

ジュリアン・ソレル	二〇
可能性の文學	二六

作品解説	平野 謙 三
織田作之助入門	佐々木基一 三六
年譜	三九
参考文献	四二

田中英光集 目次

卷頭寫眞
筆 蹟

オリムボスの果實……………三三

桑名古庵……………一八〇

曙 町……………一九一

嘘……………二二五

さようなら……………三三〇

魔王……………三四三

作品解説……………平野 謙 三六四

田中英光入門……………佐々木基一 三六九

年 譜……………四〇一

参考文献……………四二三

原 民 喜 集 目 次

卷頭寫眞
筆 蹟

焰	二六
行 列	二六
玻 璃	二七
暗 室	二九
忘れがたみ	二九
小さな庭	二九
夏の花	三〇
火の踵	三〇
壊滅の序曲	三五

鎮魂歌	三四
美しき死の岸に	三五
心願の國	三五
童 話	三六
原爆小景	三九
魔のひととき	三九
杞憂句集	三七
ガリヴァ旅行記	三七
原爆回想	三七
五年後	三七

戦争について……………三〇

死について……………三八

作品解説……………平野 謙 三六

原民喜入門……………佐々木基一 三三

年 譜……………四七

参考文献……………四一四

織田作之助集

輓轡首
百足也

炎小

冬
り
宿

戲
田
下
力

放 浪

一

大阪は二ツ井戸「まからんや」呉服店の番頭は現糞^{げんふ}のわるい男や、言ふちやわるいが人殺しであると、在所のお婆は順平にいひきかせた。

——「まからんや」は月に二度、疵^{きず}ものやし、みつきや、それから何ちやかや一杯呉服物を一反風呂敷にいれ、南海電車に乗り、岸和田で降りて二里の道あるいて六貫村へ着物賣りに來ると、きまつて現糞^{げんふ}のく雨が降つて、雨男である。三年前にも來て雨を降らせたと、よりによつて順平のお母が産氣づいて、例もは自轉車に乗つて來るべき産婆が雨降つてゐるからとて傘さして高下駄はいてとぼとぼと辛氣臭かつた。それで手違うて順平は産れたけれど、母親はとられた。兄の文吉は月たらずゆゑきつい難産であつたけれど、その時ばかりは天氣運が良くて……。

聽いて順平は何とも感じなかつた。そんな年でもなく、寢床にはいつて癖で足の親指と隣の指をすり合はせてゐると、きまつてむら返りして痛く、またうつとりした。度重なるうち、下腹が引きつるやうな痛みに驚いたが、お婆は脱腸の氣だとは感付かなかつた。寢いと小便をした。お婆は粗相を押へるために夜もおち／＼寢ず、濡れてゐると敵^{たふ}き起し、のう順平よ、良久聽きなはれや。そして意地わるい快感で聲も震へ、わりや繼子^{よこご}やぞ。

泉北郡六貫村よろづや雜貨店の當主高峰康太郎はお婆の娘おむらと五年連れ添ひ、文吉、順平と二人の子までなしたる仲であつたが、おむらが産で死ぬと、これ倅ひと後妻をいれた。これ倅ひとはひよつとすると後妻のおそでの方で、康太郎は評判のおとなしい男で財産も少しはあつた。兄の文吉は康太郎の姉賀の金造に養子に貰はれたから良いが、弟の順平は乳飲子で可哀相だとお婆が引き取り、ミルクで育ててゐる。お婆が死ねば順平は行きどころが無いゆゑ繼母のある家へ歸らねばならず、今にして寢小便を癒して置かねば所詮いぢめられる。後妻には連子があり、おまけに康太郎の子供も産んで、男の子だ。

……お婆はひそかに康太郎を恨んでゐたのであらうか。順平さへ娘の腹に宿らなんなら、まからんやが雨さへ降らせなんだからと思ひ、一途に年のせゐではなかつた。言ふまじきことを言ひ聽かせるといふ残酷めいた喜びに打負けるのが度重つて、次第に效果はあつた。繼子だとはどんな味か知らぬが、順平は七つの頃から何となく情けない氣持が身にしました。お婆の素振りが變になり、みる／＼しなびて、死んで、順平は父の所に戻された。

ひがんでゐるといふ言葉がやがて順平の身邊をとりまいた。一つ違ひの義弟と二つ違ひの義姉があつて、その義姉が器量よしだと子供心にも判つた。義姉は母の躰がよかつたのか、村の小學校で、文吉や順平の成績が芳しくないのは可哀相だと面と向つて言ふのだ。兄の文吉はもう十一であるから何とか言ひかへしてくれるべきなのに、いつもげらげら笑つてゐた。眼尻といふより眼全體が斜めに下つてゐて、笑へば愛敬よく、また泣き笑ひにも見られた。背が順平よりも低く、顔色も悪かつた。頼りない男であつたが、順平には頼るべきたつた一人の兄だつたから、學校がひけると、文吉の後に隨いて金造の家へ行くことにした。

金造は蜜柑山をもち、慾張りと言はれた。男の子がなく、義理で養子にいられたが、岸和田の工場で働かせてゐる娘が子供をもうけ、

それが男の子であつたから、いきなり氣が變り、文吉はこき使はれた。牛小屋の掃除をした。蜜柑をむしつた。肥料を汲んだ。薪を割つた。子守をした。その他いろいろ働いた。順平は文吉の手だすけをした。兄よ、わりや教場で糞したとな。弟よ、わりや寝小便止めとけよ。そんなことを言ひかはして喜んでゐた。

康太郎の眼はまだ黒かつたが、しかしこの父はもう普通の人ではなかつた。悪性の病をわづらつて惡臭を放ち、それを消すために安香水の匂ひをブン／＼させてゐたが、そんな頭の働かせ方がむしろ不思議だとされてゐた。寝てゐると、壁に活動寫眞がうつるやうであつた。ある日、浪花節語りが店の前に來て語つてゐるから見て來いといひ、順平が行かうとすると、繼母は唖鳴りつけて、われも狂人か、さう言つて繼母はにがに氣であつた。その日から衰弱はげしく、大阪生玉前町の料理仕出し屋丸龜に嫁いてゐる妹のおみよがかつけると、一瞬正氣になり、間もなく康太郎は息をひきとつた。

焼香順のことでおみよ叔母は繼母のおそでと口喧嘩した。それでは何ぼ何でも文吉や順平が可哀相やと叔母は言ひ、氣晴しに紅葉を見るのだと二人を連れて近くの牛瀧山へ行つた。瀧の前の茶店で大福餅をたべさせながらおみよ叔母は、叔母さんの香奠はどこに誰よりも一番澤山やさかいお前達は肩身が廣いと聽かせ、そしてぽんと胸をたたいて襟を突きあげた。

十歳の順平はおみよ叔母に連れられて大阪へ行つた。村から岸和田の驛まで二里の途は途中に池があつた。大きな池なので吃驚した。順平は國定教科書の「作太郎は父に連れられて峠を……」といふ文句を何となく想出したが、後の文句がどうしても頭に泛んで來なかつた。見送るといつて隨いて來た文吉は、順平よ、わりや叔母さんの荷物もたんかいやとたしなめた。順平は信玄袋を擔いでゐたが、左の肩が空いてゐたのだ。文吉の兩肩には荷物があつた。叔母はしかし、蜜柑の小さな籠をもつてゐるだけで、それは金造が土産

にくれたもの、何倍にもなつてかへる見込がついてゐた。

岸和田の驛から引返す文吉が、直きに日が暮れて一人歩きは怖いこつちやろと叔母は同情して五十錢呉れると、文吉は、金はいらぬ、金造伯父がわしの貯金帳こしらへてくれると言つて受取らず、歸つて行つた。そんなことがあるものか、文吉は金造に欺されてゐる、今に思ひ知る時があるやろと、電車が動き出して叔母は順平に言つた。はじめて乗る電車にまごついて、きよろきよろしてゐる順平は、碌々耳にはいらなかつた。電車が難波に着くと、心に一寸した張りがついた。大阪へ行つたらしつかりせんと田舎者やと笑はれるぞと、兄らしくいましめてくれた文吉の言葉を想出したのだ。

叔母の家についた。眩い電灯の光でさま／＼な人に引き合はされたが、耳の奥がちーんと鳴り、人の顔がす／＼と遠ざかつて小さくなつたり、急にでつかく見えたり、さすがに呆然としてゐた。しつかりしよと下腹に力を入れると差し込んで來て、我慢するのが大變だつた。香奠返へしや土産物を整理してゐた叔母が、順ちゃんよ、お前の學校行きの道具はときくと、すかさず、ここにあら。信玄袋から取出してみせ、はじめて些か得意であつた。然るに「ここにあら」がをかしいと嘯はれて、それは叔母の娘で、尋常一年生だから自分より一つ年下の美津子さんだとあとで知つた。美津子は虱を湧かしてゐてポリポリ頭をかいてゐたが、その手が吃驚するほど白かつた。

遅い夕飯が出された。刺身などが出されたから、まごついて下をむいたまま黙々とたべ終り、漬物の醬油の餘りを嘗めてゐると、叔母は、お前は今日から丸龜のぼん／＼やさかいそんなけ／＼な眞似せいでもええといひ、そして女中の方を向いてわざ／＼と涙を泛べた。酒をのんでゐた叔父が二こと三こと喋ると叔母は、猫の子よりましだんがナと言つた。ふんと叔父はうなづいて、しかしえらい瘦せとるなアと言つた。

さつぱりした漬物を着せられたが、養子とは兄の文吉のやうなも

のだと思つてゐた身に、何かしつくりしない氣持がした。買喰ひの錢を與へられると、不思議に思つた。田舎の家は雜貨屋で、棒ねぢ、犬の糞、どんぐりなどの駄菓子だ菓子を商つてゐるのに、手も出せなかつたのだ。一と六の日は駒ヶ池の夜店があり、丸龜まるかめの前にも艶歌師が立つたり、アイスクリン屋が店を張つたりした。二錢五厘づつ貰つて美津子と夜店に行く時は、帶の中に銅貨をまきこんで、都會の子供らしい見榮を張つた。しかし、筈はしをさかさにした形のアイスクリンの器をせんべいとは知らず、中身を嘗めてゐるうちに器が破けてはつとし、辨償しなければならぬと蒼くなつて嘔おうはれるなど、いくら眼をキョロキョロさせてゐても、やはり以後かたくりましめるべき事が随分多かつた。

ある日錢湯へ行くと言つて家を出た。道分つてんのかとの叔母の聲をきき流して、分つてまんがナ。流暢に出た大阪辯に弾みつけられてどんどん驅け出し、勢よく飛び込んでみると、おやッ！ 明るいところから急に變つた暗さの中にも、大分客子が違ふとやがて氣が付いて、わいは、わいは、あと聲が出ず、いきなり引きかへしたが、そこは錢湯の隣の果物屋の奥座敷で、中風で寝てゐるお爺がきよとんとした顔であとを見送つてゐた。表へ出ると、丁度使ひから歸つて來た滅法背の高いその小僧に、何んぞ用だつかと問はれ、いきなり風呂呂錢にもつてゐた一錢銅貨を投げ出し、ものも言はずに蜜柑を一つ掴んで逃げ出した。ところが、それは一個三錢の蜜柑で、その時のせはしない客子がをかしいと、ちよくちよく丸龜の料理場へ果物を届けに來るその小僧があとで板場（料理人のこと）や女中に笑ひながら話し、それが叔父叔母の耳にはいつた。お前、えらいぼろい事したいふやないか。叔母にその事をいはれたと、順平はべたりと疊に手をついて、もう二度と致しまへん。うなだれて眼に涙さへ泛べるのだつた。ひやかす積りであつた叔母はあつ氣にとられ、そんな順平が血のつながるだけにいつそいぢらしく、また不氣味でもあつたので、何してんねんや、えらいかしこまつて。さ

う言つて、大袈裟に笑ひ聲を立てた。叱られてゐるのではなかつたのかと、ぼつとすると、順平は媚こびた笑ひを黄色い顔に一杯うかべて、果物屋のお爺がぼんぼんは何處どこさんの子供衆や、學校何年やときたなどとはかに饒舌じょうぜつになつた。が、果物屋のお爺といふのは啞おどろであり、間もなく息をひきとつた。

尋常五年になつた。誰に教へられるともなく始めた寝る前の「お休み」がすつかり身についてゐた。色が黒いさかいと茶斷ちをしてゐる叔母に面と向つて色が白いとお世辭を言ふことも覺えた。また、しよつちゆう料理場でうろうろしてゐて、叔父からあれ取れこれ取つてくれと一寸した用事を吩咐ふくられるのを待つといふ風であつた。氣をくばつて家の客子を見てゐる内に、板場の腕を仕込んで行末は美津子の聲にし身代も譲つてもよいといふ叔父の肚の中が讀みとれてゐたからであらうか。

叔父は生れ故郷の四日市から大阪へ流れて來た時の所持金が僅か十六錢で、下寺町の坂で立ちん坊をして荷車の後押しをしたのを振出しに、土方、沖仲仕、飯屋の下廻り、板場、夜立きうどん屋、關東煮の屋臺などさまざまな商賣を経て、今日、生國魂神社前に料理仕出し屋の一戸を構へ、自分でも苦勞人と言ひふらしてゐるだけに、順平を仕込むのにも、一人前の板場になるには先づ水を使ふことから始めねばならぬと、寒中に氷の張つたバケツで皿洗ひをさせ、また二度や三度指を切るのも承知の上で、大根をむかせてけん（刺身のつま）の切り方を教へた。庖丁が狂つて手を切ると、先づ、けんが赤うなつてゐるぜといはれた。手の痛みはどないやとも訊いてくれないのを、十三の年では可哀相だと女子衆の囁きが耳にはいるまゝに、やはり養子は實の子と違ふのかと改めて情けない氣持になつた。

叔父叔母はしかし、順平をわざ／＼繼子扱ひにはしなかつたのだ。そんな暇もないといつた顔だつた。奇體な子供だと思つても、深く心に止めなかつた。商賣柄、冠婚葬祭や町内の集合の料理など

の註文が多かつたから、近所の評判が大事だつた。生國魂神社の夏祭には、良家のぼんぼん並みに御輿かつぎの揃ひの法被もこしらへて呉れた。そんな時には、美津子の聲になれるといふ希望に燃えて、美津子を見る眼が貪慾な光を放ち、ぼんぼんみたいに甘えてやう、大根を切る時庖丁振り舞して立ち廻りの眞似もしてみたら、お茶の苦情言うてみたら、叔父叔母はどんな顔するやろと思ふのだつたが、順平は實行しかねた。その頃、もう人に感付かれた筈だが、矢張り誰にも知られたくない一つの祕密、脱腸がそれと分る位醜くたれ下つてゐることに片輪者のやうな負け目を感じ、これあるがために自分の一生は駄目だと何か諦めてゐた。想ひ出すたびに、ぎやあーと腹の底から唸り聲が出た。ばかばかべんべんうらうらうらと變なひとり言も呟いた。

ある日、美津子が行水をした。白い身體がすうつと立ち上つた。あつちイ行きイ。順平は身の置き場もないやうな恥しい氣持になつた。夜想ひ出すと、急に、ばかばかべんべんうらうらうら。念佛のやうに唱へた。美津子にはつきり嫌はれたと蒼い顔で唱へた。近所のカフエから流行歌が聞えて來た。何がなし郷愁をそそられ、その文吉のことなども想ひ出し、泣いたろ、さう思ふとするすると涙がこぼれてきて存分に泣けた。二度と見ない決心だつたが、翌くる日、美津子が行水をしてゐるとやはりそれはそれはした。そんな順平を仕込んだのは板場の木下であつた。

板場の木下は、東京で牛乳配達、新聞配達、料理屋の帳場などしながら苦學してゐたが、大震災に逢ひ、大阪へ逃げて來たと言つた。汚い身装いで雇はれて來た日、一緒に風呂へ行つたが、木下が小さい巾着を覗いて一枚一枚小銭を探し出すのを見て同情し、震災の時火の手を逃れて隅田川に飛び込んで泳いだ、袴をはいた女學生も並んで泳いでゐたが、身につけてゐるものが邪魔になつて到頭溺死しちやつたといふ木下の話をきくと、順平は譯もなく惹き付けられ、好きになつた。大阪も随分揺れたことだらうなと、長い髪の毛

にシャボンをつけながら木下が問ふと、えらい揺れたぜと順平はいひ、細く説明したが、その日揺れ出した途端未だ學校から退けて來ない美津子のこと氣がつくと、悲壯な表情を装ひながら學校へ駆けつけ、地震怖かつたやろ、さういつて美津子の手を握つたら、何んや、阿呆らしい、地震みたいなもの、ちよつとも怖いことあーらへんわ、そして握られた手はそのままだつたが、奇體な順ちゃん、すけべいと言はれて随分情けなかつたなどとは、さすがに言はなかつた。

女學生の袴が木の上にぼつかりひらいて……といふ木下の話は順平の大人を眼覺ました。辯護士の試験をうけるために早稲田の講義録をとつてゐるといふ木下は、道で年頃の女に會ふときまつて尻振りダンスをやつた。順平も尻を振つて見せ、げらげら笑ひ、そしてあたりを見廻すのだつた。

ある時、氣がついてみると、ふらふらと女中部屋の前にたたずんでゐた。あくる日、千日前で「海女の實演」といふ見世物小屋にはいり、海女の白い足や晒を卷いた胸のふくらみをちつと見つめてゐた。そして又、ちがつた日には、「ろくろ首」の疲れたやうな女の顔にうつとりとなつてゐた。十六になつてゐた。二皮目だから今に女泣せの良い男になると木下に無責任な賞め方をされて、もう女學生になつてゐた美津子の鏡臺からレイトクリムを盗み出し顔や手につけた。匂ひを感じかれぬやうに、人の傍によらぬことにしてゐたが、知れて、美津子の嘲笑ひを買つたと思つた。二皮目だと已惚れて鏡を覗くと、兄の文吉に似てゐた。眼が斜めに下つてゐるところおでこで鼻の低いところ、顔幅が廣くて顎のすぼんだところ、そつくりであつた。ひとの顔を注意してみると、皆自分よりましな顔をしてゐた。硫黄の匂ひする美顔水をつけて化粧してみても追つ付かないと思ひ諦めて、やがて十九になつた。數多くある負目の上に容貌のことで、いよいよ美津子に嫌はれるといふ想ひが強くなつた。ただ一途にこれのみと頼りにしてゐる板場の腕が、この調子で行

けば結構丸龜の料理場を支へて行けるほどになったのを、叔父叔母は喜び、當人もその氣でひたすらへり下つて身をいれて板場をやつてゐる忠實めいた態度が、しかし美津子にはエスブリがないと思はれて嫌に思つてゐたのだつた。容貌は第二でその頃學校の行きかへりに何となく物をいふやうになつた關西大學専門部の某生徒など、随分妙な顔をしてゐた。しかし、此の生徒はエスブリといふやうな言葉を心得てゐて、美津子は得るところ少くなかつた。³³と封をした手紙をやりとりし、美津子の胸のふくらみが急に目立つて來たと順平にも判つた。うかうかと夜歩きを美津子にして、某生徒に胸を押へられ、ガタガタ醜惡に震へた。生國魂神社境内の夜の空氣にカチカチと齒の音が冴えるのであつた。やがて、思ひが餘つて、捨てられたらいややしと美津子は乾燥した聲でいひ、捨てられた。日がち、妊娠してゐると両親にも判つた。女學校の卒業式をもう濟ませてゐることで、両親は赤新聞の種にならないで良かつたと安堵した。ある夜更け美津子の寢室の前に佇んでゐたといはれて、嫌疑は順平にかゝつた。順平はなぜか否定する氣にもならなかつたが、しかし、美津子を見る目が恨みを呑んだ。雨の夜、ふらふらと美津子の寢顔に近づいたが、やはり無謀だつた。美津子の眼は白く冴えて、怖ろしく、順平の狂暴な血は一度にひいた。

丸龜夫婦は美津子から相手は順平でないとい告げられると、あわてて、何か改つて順平を長火鉢の前へ呼び寄せ、不束な娘やけど、貰つてくれといつた。順平ははつと兩手をついて、ありがたうございませと、かねてこの事あるを豫期してゐた如き挨拶であつた。見れば、疊の上にハラハラと涙をこぼし、眼をこすりもしないで、芝居がかつた容子であるから、丸龜夫婦も舞臺に立つたやうな思ひいれを暫時した。一杯行かうと叔父の差し出す盃を順平はかしこまつた空氣が漲つてゐた。その空氣が破れたかと思ふと、順平は、阿呆の自分にもこれだけは言はしてほしい言葉、けれど美津子さんは御承

諾のことであつたと、三十男のやうな問ひ方をした。尼になる氣持で……などと言つたら口を縫ひこむぞといひきかされてゐた美津子は、いけしやあしやあと、わてとあんたは元から許嫁やないのといつた。二親はさすがに顔をしかめたが、順平はだらしなくニコニコして胸を張り、想ひの適つた嬉しさがありありと見えて、いやらしい程機嫌を誰彼にもとつた。阿呆程強いもんはないと叔母はさすがに煙眼だつた。

婚禮の日が急がれて、美津子の腹が目立たぬ内にと急がれたのだ。曆を調べると、良い日は皆目なかつたので、迷つた擧句、佛滅の十五日を月の中の日で仲が良いとてそれに決められた。婚禮の日、六貫村の文吉は朝早くから金造の家を出て、柿の枝を肩にかついで二里の道歩いて、岸和田から南海電車に乗つた。難波の終點についたのは正午頃だつたが、大阪の町ははじめてのこと故、小一里もない生國魂神社前の丸龜の料理場に姿を現したのはもう黄昏どきであつた。

その日の婚禮料理に使ふにらみ鯛を焼いてゐた順平が振り向くと、文吉がエヘラエヘラ笑つて突つ立つてゐた。十年振りの兄だが少しも變つてゐないのて直ぐ分つて、兄よ、わりや来てくれたんかと順平は團扇をもつたまま傍へ寄つた。白い料理衣をきてゐる順平の姿が文吉には大變立派に見え、背ものびたと思へたので、そのことを言つた。順平は料理場用の高下駄をはいてゐるので高く見えたのだつた。二十二歳の文吉は四尺七寸しかなかつた。順平は九寸位あつた。順平は柿をむいて見せた。皮がぐるぐると離れ、漆喰に届いたので文吉は感心し、賞めた。

その夜、婚禮の席がおひらきになるころ、文吉は腹が痛み出した。膳のものを残らず食ひ、酒ものんだからだつた。かね／＼蛔蟲を湧かしてゐたのである。便所に立たうとすると、借瀆の紋附の裾が長すぎて、足にからまつた。倒れて、そのまま、痛い痛いとのた打ちまはつた。別室に運ばれ、醫者を迎へた。腸から絞り出して、

夜着を汚した。臭氣の中で順平は看護した。やつと落ち付いて文吉が寝いると、順平は寢室へ行つた。夜は更けてゐて、もう美津子は寝こんでゐた。だらしなく手を投げ出してゐた。ふと氣が付いてみると、阿呆んだら。順平は突きとばされてゐた。

あくる朝、文吉の腹痛はけろりと癒つた。早う歸らんと金造に叱られるといつたので、順平は難波まで送つて行つた。源生寺坂を降りて黒門市場を抜け、千日前へ行き出雲屋へはいつた。また腹痛になると、だと思つたが、やはり田舎で大根や葉つばばかり食べてゐる文吉にうまいものをたべさせてやりたいと順平は思つたのだ。

二圓ほど小遣ひをもつてゐたので、まむしや鮎の刺身を注文した。

一つには、出雲屋の料理はまむしと鮎の刺身と、きも汁のほかは不味いが、さすが名代だけあつて、このまむしのタレや鮎の刺身のすみそだけは他處の店では眞似が出来ぬなどと、板場らしい物の言ひ振りをしたかつたのだ。文吉はべちやくちやと音をさせて食べながら、おそで（繼母）の連子の濱子さんは高等科を卒業して今は大阪の大學病院で看護婦をしてゐるさうでえらい出世であるが、順平さんのお嫁さんは濱子さんより別嬪さんである、俺は夜着の中へ糞して情けない兄であるが、かんにんしてくれと言つた。聴けば、金造は強慾で文吉を下男のやうに扱ひ、それで貯金帳を作つてやつてゐるといふのも嘘らしく、その證據に、この間も村雨羊羹を買ふとて十錢盗んだら、折檻されて顔がはれたといふことだ。そんな兄と別れて歸る途途、順平は、たとへ美津子に素氣なくされ續けても、我慢して丸龜の跡をつぎ、文吉を迎へに行かねばならぬと思つた。癖で興奮して、出世しようしようと反り身になつて歩き、下腹に力を入れると、いつもより差し込み方がひどかつた。

名ばかりの亭主で、むなしく、日日が過ぎた。一寸の蟲にも五分の魂やないか、いつそ冷淡に構へて焦らしてやる方が良いやろと、ことを察した板場の木下が忠告してくれたが、そこまでの意氣も思

案も泛ばなかつた。わざと順平の子だといひならして、某生徒の子供が美津子の腹から出た。好奇心で近寄つたが、順平は産室にいれてもらへなかつた。しかし、産婆は心得て順平に産れたての子を渡した。抱かされて覗いてみると、鼻の低いところなど自分に似てゐるのだ。本當の父親も低かつたのだ。

近所の手前もあり、吩咐られて風呂へ抱いて行つたりしてゐる内に、なぜか赤ん坊への愛情が湧いて來た。しかし、赤ん坊は間もなく死んだ。風呂の湯が耳にはいつた爲だと醫者が言つた。それで、わざと順平がいれたのであらうといふ、忌はしい言葉が囁かれた。ある日、便所に隠れてこつそり泣いてゐると、木下がはいつて來て、今まで言はう言はうと思つてゐたのだが……とはじめてしんみり慰めてくれた。さうして木下は、僕はもうこんな欺瞞的な家には居らぬ決心をしたといつた。木下は、四十にはまだ大分間があるといふものの、髪の毛薄く、辯護士には前途遠ざつた。性根を入れてゐないから、板場の腕もたいしたものにならず、實は何かといや氣がさしてゐたのだ。馴染みの女給がちかごろ東京へ行つた由きいたので後を追うて行きたいと思つてゐた。その女給に通ふ爲に丸龜に月給の前借が四月分あるが、踏み倒す魂膽であつた。

その夜、二人でカフェへ行つた。傍へ來た女の安香水の匂ひに思ひがけなく死んだ父のことを思ひ出し、しんみりしてゐる順平の容子を何と思つたか、木下は耳に口を寄せて來て、この女子は金で自由になる、世話したげよか。順平は吃驚して、金は出しまつさかい、木下はん、あんた口説きなはれ、あんたに譲りまつさ。いつの間にか、そんな男になつてゐた。脱腸をはじめ、數へれば切りのない多くの負け目が、皮膚のやうにへばりついてゐたのだ。

二

文吉は夜なかに起されると、大八車に筍を積んだ。眞つ暗がりの田舎道を、提灯つけて岸和田までひいて行つた。轍の音が心細く腹

に響いた。次第に空の色が薄れて、岸和田の青物市場についた時は、もう朝であつた。筈を渡すと、三十圓呉れた。腹巻の底へしつかり入れて、ちよいちよい押へてみんことにやと金造にいはれたことを思ひ出し、そのやうにした。ふと、これだけの金があれば大阪へ行つてまむしや鮎の刺身がくへると思ふと、足が震へた。空の車をガラガラひいて岸和田の驛まで来ると、電車の音がした。車を驛前の電柱にしぼりつけて、大阪までの切符を買ひ、ブラットフォームに出た。電車が来るまで少し間があつた。そはそはして決心が鈍つて来るやうで、何度も便所へ行きたくなつた。便所から出て来ると電車が来たのであわてて乗つた。動き出してうとうと眠つた。車掌に揺り動かされて眼を覺すと、難波ア、難波終點でございまアア。早う着いたなアと嬉しい氣持で構内をちよこちよこ走りし、日射しの明るい南海道を眞つ直ぐ出雲屋の表へかけつけると、まだ店が開いてゐなかつた。千日前は朝で、活動小屋の石だたみがまだ濡れてゐた。きよろきよろしながら活動寫眞の繪看板を見上げて歩いた。首筋が痛くなつた。道頓堀の方へ渡るゴーストツップで交通巡査にきびしい注意をうけた。道頓堀から戎橋を渡り心齋橋筋を歩いた。一軒一軒節窓を覗きまはつたので疲れ、ひきかへして戎橋の上で佇んでゐると、橋の下を水上警察のモーターボートが走つて行つた。後から下肥を積んだ船が通つた。ふと六貫村のことが聯想され、金造の聲がきこえた。わりや、伊勢乞食やぞ、杭(食ひ)にかかつたらなんぼでも離れくさらん。にはかに空腹を感じて、出雲屋へ行かうと歩き出したが方角が分らなかつた。人に訊くにも誰に訊いて良いか見當つかず、なんとなく心細い氣持になつた。中座の前で浮かぬ顔をして繪看板を見上げてゐると、活動の半額券を買はるかた男が寄つて来た。半額券を買ふとは何の事か譯が知れなかつたから、答へるすべもなかつたが、これ倅ひと、ちよつくら物を訊ねますが、出雲屋は？ この向ひやと男は怒つた様な調子でいつた。振り向くと、なるほど看板が掛つてゐる。が、そこは順平に連れて

もらつた店と違ふやうだ。出雲屋が何軒もあるとは思へなかつたから、狐につままれたと思つた。しかし、鰻を焼く匂ひにはげしく誘はれて、ままよとはいひ、餓鬼のやうに食べた。勘定を拂つて出ると、まだ二十七圓と少しあつた。中座の隣の蓄音機屋の隣に食物屋があつた。蓄音機屋と食物屋の間に、狭くらしい路地があつた。そこを抜けるとお寺の境内のやうであつた。左へ出ると、樂天地が見えた。あそこが千日前だと分つた嬉しさで早足に歩いた。樂天地の向ひの活動小屋で喧しくベルが鳴つてゐたので、何かあわてて切符を買つた。まだ出し物が始つてゐなかつたから、拍子抜けがし、綴帳を穴の明くほど見つめてゐた。客の数も増え、いよいよ始つた。ラムネをのみ、フライビンズをかじり、寫眞が佳境にはひつて来ると、よう！ よう！ えゝぞとわめいてあたりの人に叱られた。美しい女が猿ぐつわをはめられる場面が出ると、だしぬけに、女への慾望が起つた。小屋を出しなに勘定してみたら、まだ二十六圓八十錢あつた。大阪には遊廓があるといつか聞いたことを想出した。そこでは女が親切にしてくれるといふことだ。エヘラエヘラ笑ひながら、姫買ひをする所はどこかと道通る人に訊ねると、早熟た小せがれやナ、年なんぼやねんと相手にされなかつた。二十三だといふと、相手は本當に出来ないといつた顔だつたが、それでも、自動車に乗れと親切にいづてくれた。生れてはじめての自動車で飛田遊廓の大門前まで行つた。二十六圓十六錢。廓の中をうろ／＼してゐると、掴へられ、する／＼と引き上げられた。ぼうつとしてゐる内に十圓とられて、十六圓十六錢。妓の部屋で、盆踊りの歌をうたふと、良え聲やワ、もう一ベン歌ひなはれナ。賞められて一層聲張りあげると、あちこちの部屋で、客や妓が笑つた。ねえ、ちよつと、わてお壽司食べたいワ、何ぞ食べへん？ 食べませうよ。擦り寄られ、よつしや。二人前とり寄せて、十一圓十六錢。食べよとゐる内に、お時間でつせといひに來た。歸つたら嫌やし、もつと居てえナ。わざと鼻聲で、いはれると、よう起きなかつた。生れてはじめ

て親切にされるといふ喜びに骨までうづいた。又、線香つけて、最後の十圓札の姿も消えた。妓はしかしいぎたなく眠るのだつた。おいと聲を掛けて起す元氣もない。ふと金造の顔が浮び、おびえた。

歸ることになり、階段を降りて來ると、大きな鏡に、妓と並んだ姿がうつつた。ひねしなびて四尺七寸の小さな體が、一層縮る想ひがした。送り出されて、もう外は夜であつた。廊の中が眞晝のやうに明るく、柳が風に揺れてゐた。大門通を、ひよこひよこ歩いた。五十錢で書生下駄を買つた。鼻緒がきつくて足が痛んだがそれでもカラカラと音は良かった。一遍被つてみたといふ思つてゐた鳥打帽子を買つた。一圓六十錢。おでこが隠れて、新しい布の匂がブンブンした。胸すかしを飲んだ。三杯まで飲んだが、あと、咽喉へ通らなかつた。一圓十錢。うどんやへはいり、狐うどんとあなかけうどんをとつた。どちらも半分たべ残した。九十二錢。新世界を歩いてゐたが、繪看板を見たいとはいつてみたいと思はなかつた。藥屋で猫イラズを買ひ天王寺公園にはいり、ガス燈の下のベンチに腰かけてゐた。十錢白銅四枚と一錢銅貨二枚握つた手が、びつしより汗をかいてゐた。順平に一眼會ひたいと思つた。が、三十圓使ひこんだ顔が何で會はさうかと思つた。岸和田の驛で置き捨てた車はどろなつてゐるか、提灯に火をいねばなるまい。金造は怖くないと思つた。ガス燈の光が冴えて夜が更けた。動物園の虎の吼聲が聞えた。叢の中にはいり、猫イラズをのんだ。空が眼の前に覆ひかぶさつて來て、口から煙を吹き出し、そして永い間のた打ち廻つてゐた。

三

夜が明けて、文吉は天王寺市民病院へ擔ぎ込まれた。雑魚場から歸つたまゝの恰好で順平がかけつけた時は、むろん遅かつた。かすかに煙を吹き出してゐたやうだつたと看護婦からきいて、順平は聲をあげて泣いた。遺書めいたものもなかつたが、腹巻の中にいつぞ

や出した古手紙が皺くちやになつてはいつてゐたため、順平に知らせがあり、せめて死に顔でもみることが出来たとは、やはり兄弟のえにしだといはれて、順平は、どんな事情か判らぬが、よくよく思ひつめる前に一度訪ねてくれるなり、手紙くれるなりしてくれれば、何とか救ふ道もあつたものをと何度も何度も繰り返して愚痴つた。病院の食堂で玉子丼を顔を突つこむやうにして食べてゐると、涙が落ちて、なにがなし金造への怒りが胸をしめつけて來た。

ところが、村での葬式を済ませた時、ふと氣が付いてみると、やはり金造には恨みがましい言葉は一言もいはずなかつた様だつた。くどく持ち出された三十圓の金を、辨償いたしますと大人しく出て、すぐごとと大阪へ戻つて來ると、丁度その日は婚禮料理の注文があつて目出度い目出度いと立ち騒いでゐる家へ料理を運び、更くまで居残つてその室所で吸物の味加減をなほしたり酒のかんの手傳ひをししたりした揚句、祝儀袋を買つて外へ出ると皎々たる月夜だつた。下寺町から生國魂神社への坂道は人通りもなく、登つて行く高下駄の音、犬の遠吠え……そんな夜更けの町の寂しさに、ふと郷愁を感じ、兄よ、わりや死んだな。振舞酒の酔ひも手傳つて、いきなり引き返へし、坂道を降りて道頓堀へ出ると、足は芝居裏の遊廓へ向いた。殆んど表戸を閉めてゐる中に一軒だけ、遣手婆が軒先で居眠りしてゐる家を見つけ、あがつた。客商賣に似合はぬ汚い部屋で、ぼつねんと待つてゐると、おほけにと妓がはいつて來た。醜い女だが、白粉と髮油の匂ひがブンブンしてゐた。順平はこの女が自由になるとはまるで夢のやうに思はれた。

しかし、本能的に女に拒まれるといふ怖れから、肩にさはるのも躊躇され、まご／＼してゐる内に、妓は眠つて了つた。いびきを聴いてゐると、美津子の傍でむなしく情けない想ひをした日日のことが聯想された。

朝、丸龜へ歸る途途、叔父叔母に叱られるといふ氣持で心が暗かつたが、ふと丸龜から逐電しようといふ心を決めると、ほつとした。家